

USCPA合格体験記

遠山 順子

平成17年の『年女』としてこの「しんじゅく」にUSCPAの獲得を宣言してから約1年半、渡米受験回数5回で全科目に合格させてもらいました。8年にも及んだ税理士試験と比べるとかなり「あっけない」受験生活でしたが、各科目の合格が1年半しか有効期間がないため、一科目づつ受験した私は常に受験→合格(不合格)→新しい(前の)科目の準備→受験→受けた科目の再チャレンジへの準備→合格通知のサイクルを3ヶ月ごとに繰り返して息をつく間もないような調子でした。試験の手応えはいつもパッとせず受験が終わったあとはいつもひとり寂しくグアムの海をビールを片手に眺めていました。

税理士試験が終わったのは平成6年、かなり知識が陳腐化してきていたのが気になりだしたことで、夫がEA(米国税理士)にチャレンジしていたこと、TOEICの点数が伸びてもなんの仕事上の見返りもないと感じてきたこと、前々から税理士より会計士が格好よく見えたことが受験のきっかけでした。

キャッシュフロー会計、自己株式、税効果会計、ストックオプション、デリバティブという2000年以降に盛り込まれた新会計基準はUSCPAの受験を

通して習得できました。税法・会社法ともにLLP、Cコーポレーションの内容が多くなってきてきたのでその意味では日本の会社法を先取りして勉強できたというお得な受験でした。また監査においても、サーベンスオックレイアクトいわゆるSOX法が最もトレンドな試験範囲となっていたことも先駆的な勉強を可能にしてくれました。

USCPAの受験層は20代から30代の海外の大学で勉強した方、あるいは外資系企業で働く方、または日本の公認会計士試験経験者が多く見受けられ、私からみると恐るべき若くチャレンジ精神旺盛な超一流企業のエリートの集団です。英語もITもイマイチの私とは大違いです。若い彼ら(中には大学生の長男の同級生もいました)と週一回の勉強会を正月の例外もつくらず11時ごろまでやったことが今では楽しい思い出です。試験が終わるたびに集まったご苦労さん会は同じ目的を持つ連帯感でつながっていることをいつも感じる心地良い空間でした。

2004年4月より試験はすべてPC化・科目合格有の新制度で、試験の構成はマルチプルチョイス(選択問題)とPCならではのシュミレーションの



組み合わせです。

シュミレーションの中にはクライアントからの質問に対してレターを書く、監査に不慣れな会計士に適切なアドバイスのメモをかくというような自分の考えを相手に納得してもらえるように表現する能力を問われ、単なる理論ではないこの試験の実践的な面が強調されていました。そのほかに情報のリサーチ能力が試され、膨大な条文から適切な部分を拾う能力を現在の会計人に必須のものを考えているのがよくわかりました。一科目4時間にも及ぶPC上の試験はかなり過酷であったのは確かですが、一科目ずつ受験が可能になったことで負担感は少なかったです。

デラウェア州の登録手続きが終了し、今は、アメリカ人の申告等に関わることがおおくなりましたが、あくまでも日本の確定申告にとどまっています。ただし、アメリカの申告書が読めること計算の流れがわかっていることはとてもやりやすくしてくれています。

実際には英語で日本の税法をクライアントに説明することのほうが多いので、やはり英語能力だ

けは高めておかないと仕事になりません。いまだにラジオのビジネス英会話等をかかさず聞き、TOIECの受験も続けています。900点近くとれるようになったらUSCPAを名乗ろうかと考えています。それまで誤解をまねきそうなので控えたいと思います。

この1年半家庭を顧みずに毎日夜遅くまで自習室にいることを許してくれた夫と家事を負担してくれた子供達には感謝の限りです。いま2人の男の子は上が日本の公認会計士試験、次男は大学入試を目前に控えています。日本とアメリカの会計士の誕生が遠山家の2006年の目標でしたが片割れしか実現できず、正直私の喜びはかなり半減しています。またそれだけ日本会計士試験の厳しさを感じます。司法試験のようにはやくなって欲しいものです。

合格と一緒に喜べるよう、お祝いに頂いたシャンパンはいまだワインラックに飾られたままです。この試験が終わって「Never to be late to start something new!」何かを始めるのに遅すぎるということはないというのを実感し次なるチャレンジを探しています。

